

%, 4 日以上も引續き自覺感を訴える 者を見ず. 他覺感無し.

有効期間. 目下臨床實驗に併行して検討中, 長期間有効なるものと思惟されるが, 現在に於いては1年~1年半に限定している.

臨床實驗を27年11月より, 大阪醫大産婦人科小島教授並に石崎産婦人科醫院, 後に東京都奴田原産婦人科醫院に於いて續行中にして(現在迄の狀況別面参照) 内膜に及ぼす病理學的變化に就いては學會の際發表, 從來の避妊用具の缺點を理論的に検討し, 其の理論にマッチした材質並に形狀を案出するに至つたものである. (1953年1月17日之記)

23. 腔式不妊手術の簡易化

(信大) 岩井 正二

不妊手術を腔式に行ふことの有利な點は多數の術者の認める所であるが, 何となくやり難い, 時間がかかる等で現在は特別の熟練した術者, 特にやり易い症例に限られて利用されてゐる状態である. その原因は ① 手術野の狭いこと. ② 視覚を用いることが困難で觸覺を必要とする. の二點につきる. 從來はこの兩者が相俟つて手術を困難にしていた. 即ち見えないために手術野の狭い點が必要以上に痛感され手術を難澁させていた. 従つて術者の慣れ, コツを必要としていた. 若し手術の全過程を目で見ながら行い得れば手術野が或程度狭くてもその操作はかなり容易となつてくる. 殊に不妊手術に行われる操作自体は元來簡単なものであるからこの問題が解決されれば本手術は總ての初心者にも極めて容易となるわけである. 余はこの點に着目し種々研究した結果腹腔内に光源を有する特殊の照明用器械を考察し, 之を用いて次の如き成績を得た.

1. 症例は昭和26年2月から本年1月迄の2年間の不妊手術をのぞむもの150例で, 之はこの期間中の適應症例の全体であり症例の難易による撰擇は行わなかつた.

2. 症例の大部分を占める妊娠合併例(130例)のうち4ヶ月迄の直接内容除去術を行つた115例では手術後直ちに, 5~8ヶ月でアブレル氏法, リバノール法, ゴム風船法を行つた15例では娩出後24~48時間後に本手術を行つた.

3. 卵管に加へた操作は大部分がマドレーネル氏法で時に Pomeroy 氏法, 焼灼切斷等を行つた.

4. 手術所要時間は 最短4分 最長17分で平均9分で

ある.

5. 38° 度以上の發熱は全例に認めず平均在院日数は6日である.

上記の成績を得たる方法を寫眞其の他によつて述べたい.

24. 卵管不妊手術の検討

(名市大) 水野潤二, 橋川 正, 林 邦子
山岸敏子

現在婦人に對する永久不妊法としては, 手術によるものを妥當とし, その手術は卵管に施されるのが適當とされている. 而して卵管に對する不妊手術の方法は古くから種々の考案工夫がなされ細かく數えるなら20種にも上るであらう. その中に於て Madlener 氏法が最も簡單で而も確實な方法として一般に最も廣く採用されて來ている. 然るに近來不妊手術實施者の増加するにつれ, Madlener 氏法の失敗例を耳にすることが屢々であり, 吾が教室に於てもかかる例を免れ得なかつた. 之を例數1,000以上の内外8氏の報告を綜合して見るに, 大体1,000例に就き2.5例の失敗率となつてゐる. 此の統計的數字のみからすると敢て高率といふ程ではないが, 最近の如く妊娠中絶と同時に本法が行はれる場合には, この失敗率は更に上昇するであらうと考えられ, 且元來が何等の苦痛のない健康人に施される場合が多いのであるから, 失敗した場合被術者の醫師に對する不信を招くべく, 又醫師としても甚しく面目を失し不快を免れ得ない. 然も今後益々不妊手術を希望するものは増加するであらうから, 卵管不妊手術に對し検討を加え, Madlener 氏法に代るより確實で而も容易な方法を撰擇規定することは必要なことと考えられる.

終戦後から昭和27年10月末に到る間, 吾が教室に於て, 實施せられた卵管不妊術は161例であるが, 約2年前から上記の問題を考慮して種々なる方法を採用し, 又特に卵管切斷轉移法 (Irving 氏法の變法とでもいふべき方法) を考案實施して來た. 即ち次の如くである. (カッコ内は妊娠中絶と同時に施行した例數)

1. Madlener 氏法	63(37)
2. 卵管切斷轉移法	43(38)
3. 其の他の方法	55(34)
内 Labhard 氏法	8(6)
Peitmann 氏法	6(6)
Liepmann 氏法	13(7)
楔狀切除	23(15)

Pomeroy 氏法, 其他 5 (3)

此等に対し手紙による照會により, 更に可能なものは來院を求めて種々の調査, 並に検査を行つた。その結果, 今まで回答を齊らした 63 例中に於て 4 例の再妊娠例があり, それは何れも Madlener 氏法によるもので, 内 3 例は妊娠中絶術と同時に施行せられたものであつた。而して確實にして且, 組織の切除を必要とせず, 簡単な方法として Madlener 氏法に代るものは, 卵管切斷轉移法であるとの結論が得られた。以上

25. 卵管角焼灼による永久不妊法 (第 2 報)

(東京逓信病院) 安井 修平, 楠本 雅彦
下平 和夫, 古屋 鞆彦

永久不妊法に對しては現在専ら腹式或は陰式に依る卵管結紮法が行はれて居るが觀血的手術を行ふことなく永久不妊法を行ふ目的に卵管角焼灼法が考案されて居る。本法は既に 100 年前 Froriep によつて創案せられ, その後 1916 年 Dickinson, 1929~1930 年西崎, 1934 年 Hyams 等の報告があるが未だ一般化されてゐない。

吾々は第 1 報に於て Hyams 考案の焼灼器を用ひ電氣メス用の電源を使用して卵管角焼灼による永久不妊法を追試した。Hyams は卵管角を正確に定めるためにレ線透視を以てしたが相當繁雜であることと他方觸感によつて卵管角を探し得ることが出来ると思ふので透視を廢して専ら觸感法を利用した。先づ最初に豫備實驗として婦人科疾患で子宮剔除をすべき例に手術前焼灼を試み剔出子宮に就て焼け具合を検査した。然る後臨牀的に永久不妊をする者に焼灼を行ひ一定期間後に子宮卵管造影法を施して卵管角閉鎖の状態を検査した。而して第 1 報は

昭和 27 年 8 月 2 日日本醫事新報誌上に掲載した。此の時の成績は餘り良好でなかつた。その原因は電源の適當でないことが明となり爾來日本無線株式會社の早川工學士が鋭意改良を加へて MM2G なる電源を作製して今日に及び吾々は更に本装置を用ひて臨牀實驗を行ひ昭和 28 年 1 月 12 日現在に於て 178 例の實驗例を得て居る。而して現在までに卵管造影法を施行して卵管角閉鎖の状態を調査したものが 54 例ある。

卵管造影法は焼灼後 2~3 ヶ月に施行するから學會までには例数は増加すると思ふが今迄の成績を表示すると次の如くである。

表によつて明な如く卵管角の焼灼法によつて現在までに明瞭となつた 54 例に就て兩側閉鎖せるもの 70.4%, 一側のみ閉鎖せるもの 22.3%, 兩側共に閉鎖せず通過するもの 7.4% である。一側のみ閉鎖せる 12 例中 1 例が妊娠し, 兩側通過の 4 例中 3 例が妊娠して居る。従つて 54 例中 4 例 (約 7%) の妊娠がある。今迄に焼灼した 178 例中 7 例が妊娠して居る (4%) こととなる。

以上の成績は本法による永久不妊法としては満足すべきものと思ふ。

焼灼法は今回は流産と同時にへ行つた方が成績がよいように見える。ラボナールの靜脈麻酔の下に行ひ 2~3 時間後歩行歸宅させる。若しも兩側不通とならねば再焼灼をして差支ないから卵管結紮による永久不妊手術に比して甚だ有利である。副作用として次回月經來潮まで白帶下が少々増加する位で大了ことはない。唯 178 例中實驗初期に於て一例だけ子宮角が強く焼けて穿孔した例があつたことは遺憾である。

	子宮卵管造影法を施行せるもの				焼灼總數
	兩側不通	片側不通	兩側通	計	子宮卵管造影法を施行せざるものも合せた合計
搔爬兼焼灼 (妊娠せる者)	29(74.4%)	8(20.5%)	2 (5.1%) (2)	39 (2)	144 (4)
單に焼灼のみ (妊娠せるもの)	9(60.0%)	4(26.7%) (1)	2(13.3%) (1)	15 (2)	34 (3)
合 計 (妊 娠)	38(70.4%)	12(22.2%) (1)	4 (7.4%) (3)	54 (4)	178 (7)

26. 卵管間質部電氣燒灼による人工不妊法

(日大) 橋爪 一男, 紀平 正生
関口敬八郎

近年人工妊娠中絶に依る危険例の報告が少くないの

で, 之が人工不妊法への轉換の要あるを痛感し 1951 年 8 月より卵管間質部 (子宮卵管口部) の電氣燒灼法に依る不妊法を企圖し, 余等の考案した電氣燒灼消息子に依り, 動物並に剔除子宮に於て焼灼度を決定した上, 1952